

絵画の指導についての模索

— 自作を教材として用いる試み 4 —

黒 木 重 雄

A Search for Instruction on Painting

— An Attempt to Use my Own Works as a Teaching Material 4 —

Shigeo Kuroki

2013年に宮崎県文化賞というのをもらった。その記念に作品集を作った。内容は、大学を卒業してから2013年までの作品を、駆け足で紹介するというもの。タイトルは『つづけずにつづける』。これは、私が大切にしている制作姿勢。同じような絵は続けて描かないようにしながら、絵を描き続けるという意味。この作品集を友人や知人に配ったところ、質問を受けた。それは、続けずに続けるみたいなことが本当にできるのか？というもの。と、そんなことをホントにやろうとすれば減茶苦茶つらいのではないかと？というもの。確かに、本当に続けずに続けられているかという、少々怪しい。自分では前とは違う絵を描いたつもりでも、他人の目にはそうは映らないかもしれないし、同じ題材を2、3回使うこともなくはない。とはいえ、同じような絵を描き続けている絵描きに比べれば、続けていないと思っている。では、このような制作は減茶苦茶つらいのかと言えば、続けて描くよりは、はるかにつらい。私は両方やったから解る。同じような絵を続けて描かない場合は、新しい題材探しが必要になるし、制作途中での未知なるトラブルも避けては通れない。いずれも楽ではない。

さて、本稿では、そんな楽ではない制作の経緯を紹介しようと思う。今回は、2012年と2013年の2年間で制作した11作品の中から、6点を取り上げた。

1 One Artist

2012年、アクリル画、227.5×546.0cm

きっかけは、前作の『ブルーシートパレス』。深い森の中にブルーシートで作った円

形の小屋があり、隙間からは男女の絡みが見えるという作品。森もブルーシートも男女の絡みも描くのは初めてだったが、小さな作品だったので気楽に描いた。描いてみたら思いのほか面白かった。暗い中に鮮やかな青、このコントラストが気に入った。それと、ほんのちょっとの人の気配も気に入った。次は、深い森の中を舞台にした絵を大きなキャンパスに描いてみたいと思った。暗く陰鬱な色調の中に、超ド派手な何か、そんな何かを描いて、それに纏わる人もちょこっと登場させてみたい。さて、何を描けばそんなことができるのか。スケッチブックに落書きを繰り返しながら探る。1か月もやっただろうか。なんとなく見えてきた。ロケットなら、森の中も似合うし、好き勝手に配色もできる。おまけにロケットの高さを利用すれば画面の上の方にも変化を付けられて面白そうだ。いけるかもしれない。では、ロケットをどう配置すればいいのかを考える。再びスケッチブックに向かう。やっているうちにロケットがだんだん並んできた。あ、そういえば昔、フロリダをドライブしていた時に高速道路沿いに林立するロケットが現れて心躍った経験がある。あの時のあれだ。次の段階に入る。これまではテキトーにロケットらしきものを描いていたが、本気で描くとなったら話は別。ロケットを描くために必要な情報を入れる。ネットで調べて、画像を見たり、説明を読んだり。とにかく知らないことばかり。いろいろ見たが、やはりネットだけでは不十分。資料収集は抜かりなくやっておかないといずれ行き詰る。専門書も手元に置いておきたいところ。中古で世界のミサイル事典と図鑑の2冊を購入。届くなりパラパラめくる。さらに知らないことばかり。形はスマートなものからずんぐりむっくりしたものまで、多種多様。羽根のあるものや無いものなどバリエーションも豊か。これらを組み合わせれば変化に富んだ絵が描けそう。いろいろ見ておおよその見当はついた。しかしながら、どうしても掴みきれないところもある。近くに本物があれば見に行きたいところだが、そうはいかない。模型を手に入れて、それを見て解決するしかない。そう思い模型を検索するが適当なものがない。しかたがない、自分で作るか…。作りたくはなかったが、ここをうやむやにしたまま進むといつか必ず行き詰る。面倒くさいと思いながら模型を作る。遠回りのようだがこれが近道。ようやく準備が整った。制作のおおよその流れはイメージできた。が、はたして完成までたどり着けるのかどうかは解らない。視界不良な部分は多々ある。でもそれは、そこに立ち至って解決するしかない。ここで怖気づいていても始まらない。

いよいよキャンパスに向かう。2m×5mの画面に筆を入れる。調子よく進むことは稀。予想通り、視界不良だったところではことごとく行き詰まる。そのたびに打開するため

の方策を考える。こうすればいいんじゃないだろうかというのを、だいたい3つほど思いつく。1つ目は、この程度の手直しで上手くいけばラッキーだ、というもの。2つ目は、まあ、これくらいの苦労は覚悟しなければならないだろう、という程度のもの。3つ目は、超面倒くさいのでこれだけは避けたい、絶対に避けたいというもの。で、実際の制作ではどうなるかといえば、まずは1つ目をやってみてダメで、2つ目をやってみても満足できず、結局、3つ目の最高に面倒くさいのをやるという羽目になる。毎回そうなる。うすうす気付いてはいたのだが“一番面倒くさいのが正解”。これが真理。そういえば、宮崎駿も言っていた「大切なことはたいがい面倒くさい」。肝に銘じておこう。今回はいつにも増して面倒くさいことを山ほどやって10か月後に完成した。

2 死と恋

2013年、アクリル画、162.0×130.3cm

前作は視界不良個所が多すぎた。ちょっと一休み。今回は、負荷のあまりかからない絵を描きたい。負荷のあまりかからない絵とはどんな絵なのかというと、視界不良個所が少ない絵。というわけで本作に取り掛かった。本作の構造は、今どきのマンション群とその上に広がる鉛色の空、それと雪、という単純なもの。それぞれのパーツごとに見ていこう。まずは、今どきのマンション群だが、これは自宅の屋上から見える海沿いのマンション群を写真に撮ってそのまま描けばいい。すこぶる視界良好。続いて、鉛色の空だが、これは灰色のグラデーションで良いので、これも視界良好。そして、雪なのだが、今回はこれだけが視界不良。なぜなら、雪のように見えているのは、近づいてみると実は文字だったというオチがあるから。これまで、作品の中に看板や建物の装飾の一部として文字を描いたことはあっても、文字を文字として描いたことはない。私にとっては絵画空間に概念の異なる要素を組み合わせる初の試み。と大きさに言ってはみたものの、西洋の宗教画では、神の言葉が文字となって登場しているし、東洋では書と画はそもそも同居していたのだから、騒ぐほどの事ではない。がしかし、自分にとって初めてのものは初めて。はたしてそんなものが絵になるのか、それなりに視界不良なのだ。

空も描いてマンションも描いて、いよいよその時が来た。降らせる文字は、吟味に吟味を重ね“死”と“恋”にした。空から降ってくるものが“死”と“恋”なんて少女コミックっぽくてこっ恥ずかしいし、誰に命中するかわからない、なんて続けるとむず痒くなってしまいそうだが、これしかない。さて、文字の書き方なのだが、本当は活字をそのまま使って無機的に扱いたいところ。なのだが、文字色は白だし、基底材は凹凸の

あるキャンバス、どう考えても活字では上手く文字を押せそうにない。消しゴムハンコやシルクスクリーンも考えてみたが、文字が小さいためキャンバスの凸凹に負けてしまい、どれも使えそうにない。妥協の末の妥協案は、個性を押し殺して筆で書くというもの。これでやるしかない。できる限りやってみるが、なんだか丸文字っぽくなって変な甘さが出てしまった。計画ではもっとたくさん降らせる予定だったが、増やせば増やすほど甘さが増すので、早めに切り上げた。

3 御神体

2013年、アクリル画、227.5×182.0cm

前々作では、森の中にミサイルが林立している様子を描いた。12本のミサイルを描きながら、1本だけでも面白い絵ができるのではないかと思った。そこで、改めてミサイル1本の絵を考えてみた。すぐに、ミサイルを御神体として崇めるアイデアを思いついた。しかも、御神体は御神体でも日本各地にある男根を祀ったあれである。あれにはその地に住む人々の子孫繁栄の願いが託されている。それをもじって、ミサイルにその地に住む人々の平和が託されているというのはどうだろう。笑えない滑稽さが面白そう。描いてみることにした。まずはミサイルだが、御神体感を出すために色は赤、これ以外にない。形はこちらででっ上げた架空のデザイン。旧型っぽいのがいい。滑稽さを増すために半円形の吹き出し口を上下2段に付けてみた。いい感じ。そして、重要なのが紙垂。ミサイルに縄を巻いて紙垂を垂らす。これをやると一気に御神体感が出る。本作の勘所。ここまでは上手くいった。続いて脇役。ここでしくじった。まずは何を脇役にするかで迷った。御神体の周りを掃除する老人がいいか、御神体を守る番犬がいいか。どちらでも良かったのだが、このところ脇役に人間を据えることが多かったので、今回は犬にしてみることにした。とはいうものの資料を集めようにも犬は飼ってないし、近所にそれらしい番犬もいない。とりあえず、ネットで「吠える犬」と検索してみた。すると、イメージにピッタリの画像が現れた。あまりにもピッタリ過ぎた。ピッタリ過ぎていなければ、描くときにアレンジするのでそれなりにこなれるのだが、ピッタリ過ぎるとアレンジのしようがない。拾った画像そっくり描くことになってしまった。これって無断使用。いくらなんでも他人のブログの画像を勝手に拝借するわけにはいかない。いかない。いかない。いかなかないか。ユトリ口は絵葉書をそっくりそのまま描いたんだし。それに比べればこっちのやろうとしていることは、脇役として小さく描くだけの軽微なもの。「まあいいか」と思い、ついつい描いてしまった。しかし、やっぱり、

これはダメだった。この絵を描いている間は、他にもいろいろ問題を抱えていたので、そこを気にする余裕がなかったが、いろいろ問題が解決して作品が完成した途端、そこが気になるようになってしまった。それなら、そこだけ描き直せば良かったのだが、描き直そうにも日に日に展覧会期は迫ってくるし、どうしよう…。悩んだ挙句「まあいいか」と呟いて描き直さないことにした。以前「まあいいか」と呟けば呟くほど作品がつまらなくなると書いたことがある。本作では、何回も「まあいいか」を連発してしまった。ちなみに、作品が良くなる呟きは「まだまだだな」。

4 クリスマスマサイル

2013年、アクリル画、227.5×162.0cm

クリスマス为主题にしたグループ展を美術雑誌で見かけた。自分だったらどんな絵を描くかなあと想像してみた。いくつかぼんやりとしたイメージが浮かんだ。いつの頃だったのか見当もつかないが、そんなことを考えたことが引き出しに入っていたのだろう。随分な時間を経て引き出しが開く時が来た。スケッチブックに向かって新作のことを考えていた。このところミサイルの絵を続けて描いたので、別のものを描かなければと思ってはみるものの、他にあてもないのでついついミサイルをだらだらと描いていた。そしたら、ミサイルがクリスマスツリーになっているというイメージが現れた。クリスマスツリーならぬクリスマスミサイル。これは面白い。風刺も頓智も効いている。おまけに絶妙なりアティイー。自分のこれまでのアイデアの中でもトップクラス。やる気がでた。念入りにアイデアスケッチを繰り返した。その結果、海辺の広場にクリスマスミサイルが立っているという設定になった。背景は夜空。ミサイルは黒。電飾は、ミサイルの頂点から斜め下に伸びる円錐形。頂点には星形。これくらい見通しが立っていれば何とかなる。ちなみに電飾の色は未定。色とりどりが良いのか単色が良いのか、これは後で決めよう。

描き始める。まずは背景、夜の海。ミサイルが夜空に埋もれてしまわないように、夜空は黒よりちょっと明るめ、灰色のグラデーションにした。さらに、棚引く雲を描き加えておくことでミサイルとの差異を強調しやすくしておいた。仕事帰りに自転車で海沿いを走り、夜の空の様子や雲の様子を観察した甲斐もあってまずまずの出来。続いて海辺の広場。何もないと広場感が出ないので、何か小物が必要。ベンチかな…いやベンチでは甘い。あれこれ迷ったが、ちょうどいいのは車止めブロック。続いてミサイル。実は、夜景をバックに黒いミサイルを描くのに思いのほか難儀してしまった。なんとミ

サイルを夜空よりも黒くしようとして黒色を塗り重ねれば塗り重ねるほど絵の具が光ってしまい、黒く見えないのだ。これには参った。黒より暗い色は無い。お手上げ。なのだが、そう易々とあきらめるわけにもいかない。黒にも色々あるので試すことにした。ランプブラックにマースブラック、結果は効果なし。反射が原因なので、色味を変えても解決しない。ならば、艶消しメジュームを混ぜてみてはと試したが思ったほどの効果は無い。ほとんど諦めモードに入った中で、最後にダメもとで一縷の望みをかけて試したのが、普段は使わないアクリルガッシュ。ジェットブラックなる聞きなれない名前の黒。いつものアクリル絵の具に比べると練りがゆるいし、ベチャベチャしていて、余計に照かりそう。到底期待できそうになかった。ところが、予想に反し、塗ったところが乾くとソリッドな艶消しの黒になった。道が開けた。この絵の具のおかげでなんとか夜空に埋没せずにミサイルを描くことができた。とんだ綱渡りだったが、なんとか渡り切った。

仕上げは、電飾。電飾なんかテキトーに明るい点でも打っておけば、それらしく見えるに違いない、気楽にやろう。と、思いそうになったが、そんなはずはない。絶対になり。テキトーにやって良さそうなものをテキトーにやって上手くいった試しがない。これまでに何度も痛い目にあっただけで解る。なので、まずは模型を作り、それを写真に撮って、形を整えるという一番面倒くさい方法でやった。苦労した甲斐あって、苦労したようには見えない出来になった。

5 暗い海

2013年、アクリル画、162.0×130.3cm

キャンバスに紙を貼って可能性を探るということをよくやる。前作『クリスマスミサイル』の制作途中でも、背景だけの状態の画面に色画用紙を切って貼って、いろいろな可能性を探ってみた。何かいいのが見つかりでもしたらみつけものといった程度のお遊び。で、見つかった。海に向かって墜落していく旅客機。そういえば、10時間にも及ぶフライトの途中、窓を少し開けると下には真っ暗な海、この飛行機が墜落しても世界中の誰一人気づかないだろう、などと思ったことがある。早速、アマゾンで旅客機のプラモデルを注文して、100号のキャンバスを張った。

6 “S”

2013年、アクリル画、162.0×97.0cm

毎年、その年に描いた作品のひとつを年賀状にしている。2013年の晩秋、2014年の年賀状を作る際に困ったことになった。良さそうな作品は個展のチラシに載せたので使えない。かと言って、残っている作品は、死という文字が入っていたり、飛行機が墜落していたりでとても年賀状には向かない。そこで、あまり時間に余裕は無かったが、それ用にもう1枚描くことにした。年賀状用に100号の絵を描くなんて本末転倒だが、ちょっと面白そうでもあった。

2013年といえば第1子が生まれた年。なので、それをテーマにしたい気もするが、普通に描いたのでは面白くない。たかだか年賀状なんだから、ひねくってこねくってトンデモナイ作品にしたいところ。そう思い、夜な夜な枕元のスケッチブック上でひねくり回しこねくり回していたら、なんと名前が絵になってしまった。パッと見は抽象絵画だけれど、よくよく見ると上半分は“想”の字で下半分は“介”の字になっているという仕掛け。一旦漢字に見えてしまうと二度と抽象絵画には見えない。人間の脳は不思議だ。そういえば、中2の時、学級新聞『雑草』のデザインを任せられた際“雑”と“草”の文字を紙面一杯に膨らまして、その中に記事を書いたことを思い出した。

7 黒木重雄「40～50」（個展会場）

2013年3月19日～3月31日、福岡県立美術館展示室1・2・3

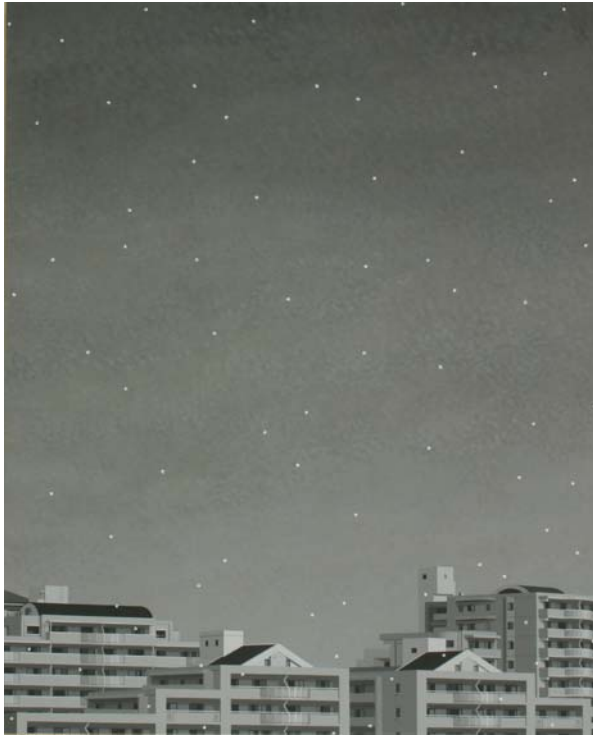
40歳から50歳までの10年間で制作した作品で個展をした。大学の恩師に700人の来場があったと満足気に報告したところ「桁が違ってないか？7000人ならまだしも700人なんてみじめな数字を晒すな」と言われた。芸術を志すというのは、具体的にはこういうことなのだと認識した。



1 One Artist



One Artist (部分)



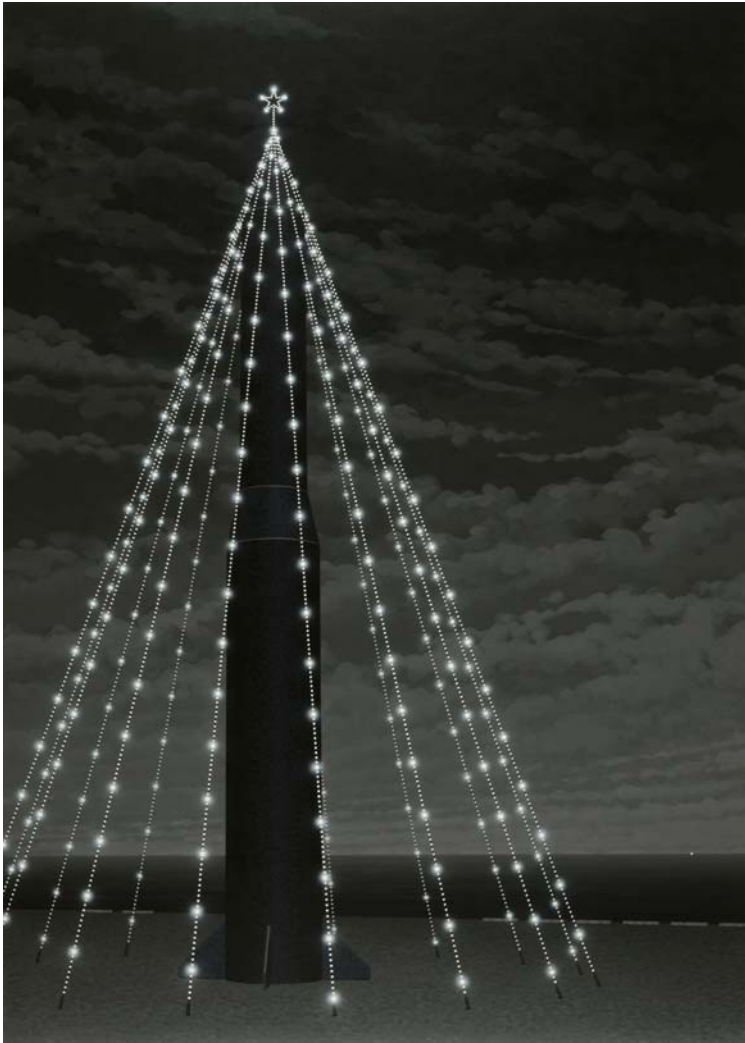
2 死と恋



死と恋 (部分)



3 御神体



4 クリスマスマサイル



5 暗い海



6 “S”



7 黒木重雄「40～50」（個展会場）